

一花炭、香、濃茶、薄茶、

此五品ヲ以テ花炭香ヲ客方エ所望シ、濃茶薄茶ハ東半東勤之、但シ通付通ナシ、東ト云ハ亭主、半東ト云ハ脇亭主也、

一客三人東半東五人ヲ定トシテ、凡客四人迄ニ東半東以上六人マデ限トス、

一座敷ハ何レノ座敷ヲモ用ユ、シカシ花月式法ノ坐敷ヲ好テ、假ニハ疊敷ニテ凡其形ヲ定ム、中略

一二三ノ式 濃茶

一客方九人迄、十種香札ヲ借テ、上中下ノ位ヲ打也、但シ月ノ札一二三上トシ、印ナキ三段ヲ中ハ天、花ハ地ト見ルベシ、

一香ノ札、小宮共五人ニ五箇、九人ニ九箇借用ヒ、上ニ二枚客札ヲ蓋ニ置、硯蓋ニノセ、尤折居十ノ内一ツ借テ、同ク硯蓋ニ置合ス、

一宗匠在バ扇子ヲ合、但宗匠茶點テ宗匠ナケレバ扇子不出札打捨ナリ、但シ主方札打事ナシ

〔茶窓閒話〕中僧行譽が曰、十服茶記録の中に、回茶貢茶といへる事は、回者聞一而知十、賜者聞一而知二との語に本づきて名づけしなり、是本非といふ茶の勝負を、風流になしたる後人の作意にして、茶道の本式にあらずとて、宗旦はこれらを茶歌舞妓と異名して用ひられざりし、

〔茶道聞書集〕甲茶香風聞、茶歌舞妓、是は世上にて取扱ふ文字、

茶カブキの名、元伯居士の頃よりもてはやせしにや、利休居士の文に、カブキ茶と云事有、如心齋其式を改正せしより、文字も片假名を用ゆ、

〔茶道聞書集〕乙良休、宗佐年忌の時、流芳軒茶カブキ、此追善の爲、茶盃五十作る、晝時より茶カブキ始、書院風爐釜四方棚の上に、茶盃二ツ重ね真中に置、下に水指上段に良休椿の畫掛る、前に三ツ具足蠟燭立香爐花入、附書院真中に張文庫の蓋に棗とも入れ飾る、客は宗安自分上坐、其外鬪ド